赤いアフリカの現実

ヴィジャイ・プラシャド＆ミカエラ・ヌホンド・エルスコグ著、脇浜義明訳
Monthly Review,　２０２４年６月１日　＊脚注は訳注

ヴィジャイ・プラシャドとミカエラ・ヌホンド・エルスコグは三大陸・社会調査研究所（Tricontinental: Institute for Social Research）で働いている。ノーム・チョムスキーとの共著に『キューバについて』（ニュープレス、2024年）がある。また、エフェミア・チェラとの共編著に『エンクルマ選集（Selected Nkrumah)』（Inkani Books、2024年）がある。エルスコグは新しい研究書『ハイパー帝国主義（Hyper-Imperialism)』（2024年1月）の共著者である。

本稿は、『レッド・アフリカ』（New York: Verso Books、2023年）におけるケビン・オチエン・オコスの分析を批判的に考察し、さらに拡張しようとするものである。筆者らは、『レッド・アフリカ』評価の全体的な枠組みを生み出した三大陸・社会調査研究所パン・アフリカの同僚たち（エフェミア・チェラ、ガッサネ・クーミヤ、グリーヴ・チェルワ、ジョニス・ゲディ・アラソー、カンバレ・ムサヴリ、タリロ・タクヴァ、イヴォンヌ・フィリップス）に感謝している。

２０２０年、ロンドンに住んでいたケヴィン・オチエン・オコスは自分が編集していた雑誌『サルベージ』に、「黒人の不活性：アフロペシミズム及び反植民地思想の抹殺」という痛烈な批判論文を書いた。人種差別と植民地主義に関する「最近の著作物は、主にアフリカやカリブ海のマルクス主義者が創りあげた伝統、オコスが「赤いアフリカ」とか「アフロ・マルクス主義」と呼ぶ伝統を、意図的に避けていると論じた論文である。ギニアビサウとカーボベルデの独立のために闘ったアミルカル・カブラルや、アンゴラの共産主義者で初代大統領だったアゴスティニョ・ネトや、モアンビークの初代大統領だったサモラ・マシェルや、オートボルタ（現ブルキナファソ）の第５代大統領だったトーマス・サンカラのような人物が創りあげた赤いアフリカ伝統である。オコス論文によると、アフロペシミズムと呼ばれる潮流は、近代化がアフリカ系の人々を「社会的死」（social death）（社会学者オーランド・パターソンの言葉）に追い込み、政治的主体としての行動もできないし、他者からも政治的主体と見られない状態となったと、黒人を描写している。このような思考流派のもとでは、近代世界の中で社会状況を超越し変革するという意思も闘いも不可能になると、オコスは述べている。そのような思考形態は人種差別構造や態度と闘おうとする人々を動けなくすると、オコスは説得力ある説明をしている。また、世界を階層区別や特権的資格がなく、人々が平等に平和に暮らせる場に変革する意欲と意思を破壊する。

論文発表から１年半後に、オコスは『サルベージ』にもう一つ論文を書いた。「脱植民地化とそれへの不満：民族解放のサイクルの再考」と題する論文である。この論文では、オコスは脱植民地化研究（Decolonial Studies)と呼ばれるアプローチを取り上げている。脱植民地化研究の手法は、政治・経済や政治思想の研究・評価から離れ、植民地主義という発想も否定し、代わって生物学的な「コロニー性」（coloniality)という概念を使うアプローチである。これはペルーの社会学者の故アニバル・キアーノが主に提唱したもの。それは世界を支配する新植民地主義的構造を見ないで、単なる一つの「権力様式」と見る。オコスは、脱植民地研究は、アフロペシミズムと同じように、世界の経済・政治構造を軽視し、階級闘争という現実を（全否定をしないとしても）最小化すると判断した。脱植民地化研

究派は、民族解放マルクス主義の伝統、あるいはオコスの言葉で表現すると「赤いアフリカ」伝統を、完全に無視する。

オコスは、アフロペシミズムと脱植民地化研究を批判的に研究する中で、それらは一応人種と人種差別の問題を取り上げはするが、人種差別と闘う実践的議論のスペースを封じてしまうような種々の認識論が働いていることを発見した。アフリカ系の子孫や植民地化された人々に世界変革のために闘う主体性を認めないし、そういう余地も与えないのである。こういう認識論はグローバルノースの学界では影響力が強く、社会的に高い地位を占めているので、それがグローバルサウスの学界にも影響を及ぼす。私的または公的研究機関を通じてグローバルサウスの学者や知識人に感染している。彼らの思想は、新植民地主義構造に対する自然発生的な反発から生じる社会運動にマイナスの影響を与え、運動に当惑感を与えて弱める。しかし、そういう認識論がグローバルノースで支配的だとはいえ、同時にそれを問題視する流れもグローバルノースにある。民族解放マルクス主義を蔑み、劣悪な思想とけなすやり方は、必ずしも成功していない。マルクス主義の伝統を完全抑圧することはできなかった。

オコスは、今紹介した2論文をまとめて、『赤いアフリカ：革命的黒人政治の復活』（*Red Africa: Reclaiming Revolutionary Black Politics*）という短い迫力のある本として出版した。この本の冒頭は、２０１５年の南アフリカの「ローズ像を倒せ」運動（#RhodesMustFall campaign）の思い出の記述で始まっている。ケープタウン大学に立っている植民地アパルトヘイトの象徴であるセシル・ローズを撤去せよ（言い換えると、植民地時代の遺物を正常なものとして扱うな）という学生運動であった。これは、緊縮財政抑圧の後の教育システム確立する闘いの一環でもあった。オコスは、この抗議運動の中で一部の活動家が推進し、後に米国のブラック・ライブズ・マター（BLM)運動によっても推進された主要理論の一つに当惑した。何故、黒人であることは「黒人の政治参加を妨げる永遠の条件である」と示唆するアフロペシミズムの立場から論説を行うのか、という当惑である。

彼が展開した議論は、いわゆる議論のための議論ではなく、まさに「革命的黒人政治」の可能性に関する議論であった。西洋の植民地的征服の数世紀前に存在したアフリカの政治と哲学の抹消、アフリカ大陸における民族解放闘争の遺産の抹消、グローバルサウスの反植民地主義形態のマルクス主義の抹消は、「絶望の姿勢」（attitude of despair）を強いる現実への屈服になると、オコスは主張し、本の中で明確に説明している。こういうアフリカ伝統の抹消は、一つにはルース・ウィルソン・ギルモアが「私的知識人の形成」と呼んだものの産物である。「私的知識人」というのは、西洋の学界で育てられ、世界の労働者が追求する弁証法から（意図的に）切り離された「歩兵軍団」である。ギルモアのような研究者の著作が、民族解放マルクス主義の貴重なアフリカ資源とオコスが自著で主張していることとの間の架け橋となっている。実際、オコスがいろいろ読書し評論する過程で感じたのは、「赤いアフリカの政治学は使い古された遺物ではなく、新たな反植民地主義未来を想像し構築できる」ということであった。それこそが、彼が『赤いアフリカ』の中で力強く、説得力ある言葉で、展開したテーマであった。

起源

今ではアフロペシミズムと脱植民地化研究に関する力強い批判は手に入るが、それらの認識論をマルクス主義的分析で批判したテキストはあまりない。今から私たちがやろうとしているのは、まさにそういう批判である。現代のアフロペシミズムの浸透と同じように当惑するのは、少し前の時代に公的な言説としてアフロペシミズムが使用された事例である。文字の形でそれが表現された最初のものは、仏のジャック・シラク政権のときの、いわゆる協力担当大臣だったミシェル・オーリヤックの発

言を伝えた新聞記事である。１９８７年の記事は、オーリヤックのアフロペシミズムとアフリカが「不幸の宝くじに当たった」というヨーロッパ的発想を戒める警告を伝えている。オーリヤックはアフリカ蔑視を戒める形で、アフリカの経済発展の出発点として「民間のイニシアチブと企業のパートナーシップ、経済開発のための義務的な出発点」に基づく資本の前進を主張して、アフリカ大陸におけるヨーロッパ的ネオリベラル政策の実行を正当化したのである。初期のアフロペシミズムにとって、アフリカは災いの場であるとう同時に機会（ヨーロッパにとって）の場であったが、主権と尊厳を確立する闘いの場ではなかった。ギニアの社会学者マンティア・ディアワラは示唆に富む自著『アフリカを求めて』(1998)(*In Search of Africa*)において、名指しで初期のアフロペシミズムを批判している。

数十年経って、アフロペシミズムは新たに息を吹き返した。その主力となったのはフランク Ｂ．ウィルダーソン三世であった。彼はオバマ政権（２００９～２０１７）の間にたくさんの重要な作品を著した。オバマ政権時代に反黒人暴力が相次いで起きて、ついに２０１３年に BLM 運動が誕生した。反黒人暴力でマヒ状態になった州や社会を黒人大統領が取り仕切り、白人暴力とそれに対する抗議運動が吹き荒れている中で国家機関の舵を取ろうとしているのは、確かに当惑させられる光景である。たとえ黒人が国の指導的立場に就いても、米国のひどい人種差別構造はびくともしないので、従って、反黒人は近代世界の存在論そのものに深く根差していると考えるのは的外れではないだろう。ウィルダーソンの著作物、２００８年の『インコグニグロ』(*Incognegro*)(匿名の黒人、認識されない黒人、という意味)、２０１０年の『アカ、シロ、クロ』(*Red, White, Black*)、２０２０年の『アフロペシミズム』が依拠し、参照したのは、アフリカ中心主義の長い伝統（典型的には１９８７年に出版されたモレフィ・ケテ・アサンテの『アフリカ中心主義思想』(*The Afrocentric Idea*) や、ポスト・マルクス主義を指向する北大西洋学界における「文化的転回」や、米国における黒人から選挙権を奪い、政治への権利を剝奪する猛攻撃（特にハイライトとなったのは１９６５年の投票権法を骨抜きにした２０１３年のシェルビー郡対ホルダー裁判である）[1]である。ウィルダーソンのアフロペシミズムは、フランツ・ファノンのような思想家をぞんざいに扱い、「ローズ像を倒せ」運動やＢＬＭの若い活動家にアピールする外見的マーカーがあったが、それは根本的に黒人研究（および赤いアフリカ）正典に貢献した貴重な文献を読み違えたか、まったく無視したものである。例えば、オコスは、アフロペシミストが１９５２年にファノンが黒人であることについて書いた好ましい作品とポスト・コロニアル期に彼が書いた「逸脱」作品とを区別していることを、例に挙げた。

アフリカ系米国人に政治的に前進する道がないならば、政治的課題を論じたり、アフロペシミストが根本的に反黒人文化・反黒人社会と規定する世界で解放の可能性を論じることに、何の意味があるであろうか？　アフロペシミズムはマルクス主義の弁証法を否定して、単なる文化論へ後退し、恒久的敗北の政治学を創りあげた。

アフロペシミズムの主要作品に大きく欠けているのは、「アフリカの伝統社会」という思想をめぐって議論を重ねた末にアフリカ大陸で生み出された理論的武器である。この「アフリカの伝統社会」という語は一部のアフリカ人社会主義者が植民地主義から抜け出す彼らの政治的回路を正当化するために活用した。「アフリカの伝統社会」という考え方を批判した重要人物はベナンの学者ポーリン・フー

[1] 投票権法とは州の勝手な判断で黒人などに不利になるように投票方法を変えることを禁止する、一種お差別是正法。これを違憲だとしてアラバマ州のシェルビー郡が「ホルダー司法長官を相手取って起こした裁判。地方裁判段階で「合憲」としてシェルビー郡を退けたが、最高裁は「違憲」と判断し、州が黒人差別的な選挙ルールを作ることができるようになった。

トンジである。彼の『アフリカ思想について』(*Sur la philosophie africaine*) (1976)は、アフリカの過去の歴史に関する部分的な知識を隠れ蓑にして、現在のアフリカ社会の動き、長い（しかし決して恒久的でない）抑圧と搾取の歴史を克服しようという現在の動きに目を閉じる「民族哲学」(ethnophilosophy)を厳しく批判している。もう一人、アフリカの超歴史性という思想の批判者はカメルーンの学者アキレ・ムベンベである。彼の作品（とりわけ２０００年の『ポスト・コロニーについて』は、いろいろ問題提起しているが、特にアフロ・マルクス主義が主要説明理論としての地域を失っているときにアフリカ大陸を襲った構造調整政策という経済的暴力を取り上げて論じている。彼はマルクス主義と民族解放を、今や死物となった要素を集めた理論として否定したが、絶望ではなく「本当の自由化政治の核心」を追求した、とオコスは評している。このような肯定的政治を追求する評論や思想的態度はアフロペシミズムの基盤に入り込まなかった。

脱植民地化研究の思想の起源はもっと当惑的である。それは主として北アメリカへ亡命した南アメリカの学者によって開発された。彼らは、南アメリカが社会改革が無駄だと思えたひどいときでなく、１９９８年にベネズエラでウゴ・チャベスが選挙に勝利するなど新しい希望が現れ始めたときに、階級関係や階級闘争を基本に置くマルクス主義的研究方法から離れていったのである。キハーノが『ラテンアメリカにおける政治権力のコロニー性とヨーロッパ中心主義』(*Coloniality of Power and Eurocentrism in Latin America*)を著したのは、チャベスが米国と訣別して、ラテンアメリカをボリバール・プロジェクトで統合するという使命に着手し始めてからであった。キハーノの本は反ヨーロッパ的で、従属から脱却する答えを追求するものと自己規定しているが、それを階級闘争ではなく（彼と同じペルー人のホセ・カルロス・マリアテギの１９２８年作品『ペルーの現実に関する７つの解説論文』(*Seven Onterpretive Essays on Peruvian Reality*)があったにもかかわらず)、先住民の伝統を美化してロマンチックに解釈する方法で行った。(ボリビア社会主義運動の指導者で２００６～２０１９年にボリビア大統領を務めたエボ・モラレスは先住民であるが、それへの言及はなく、むしろ先住民大統領に対するクーデターを支援する者もキハーノ派の中にいた）脱植民地を説きながら、キハーノ派の著作ではアフリカ人思想家への言及がほとんど皆無で、大西洋横断人身貿易（奴隷貿易）への言及もほとんどない。もともとキハーノは階級闘争に基づいて本を書き始めた（『ペルーの農民運動とその指導者たち』*(El movimiento campesino peruano y sus lider*e, 1965)が、その後の作品では民族解放マルクス主義とその希望の伝統から完全離脱した。

「脱植民地化」という言葉はキハーノ派が設定した境界の外では広く使われたが、彼らはその言葉を反植民地主義闘争の文化面だけに限定して使った。オコスはそういう政治世界には踏み込んでいないが、政治世界は重要である。歴史家のディリップ・メノンは政治研究を規定する「３つの思想クラスター」を提示した。一つは、誰が理論化し、何を理論と呼ぶかという重要な問題。グローバルサウスの知識人は現実を記述し、グローバルノースの学者が現実を理論化して記述する傾向があると言われている。知識を脱植民地化するためには、グローバルサウスの知的思考の「現存する伝統」への注意を欠かさないようにすることだ。二つは、ある言語社会から他の言語社会へ思想を翻訳移動させるのは透明性がある作業ではなく、異なる知的世界の異なる思想や概念がブレや誤解で形や内容を変えて伝わることがある。それに注意しなければならない。メノンは知的思考はモノローグでなく、異なる言語と異なる概念体系に間の対話であると言っている。最後は、時間が中立であるという発想に反対しなければならない。現実には、時間感覚はそれぞれの文化によって独特で、現在の生活に関しても、過去の歴史の解釈の点でも、文化的伝統によって異なるのだ。人類社会の中には、２～３日先のことも、人の寿命も不確かな文明もあれば、次の世紀まで未来計画を持つ文明もある。こういう考察

は社会における階級関係の評価と対立するものではないし、ヨーロッパ中心主義の文化的批判の名のもとでマルクス主義を無視する姿勢でもない。

米国の人種差別の厳しい現実を考慮すれば、ウィルダーソン等のアフロペシミズムは理解できないことはないが、脱植民地化研究の中にある敗北の政治学はとても理解できない。政治は直線的に動くものでなく、人間解放闘争の中で前進したり後退したり、ジグザグに動くものである。絶望的な困難のときでも希望の政治学を実践し続けるには大変な勇気が要る。社会矛盾から自然に発生する大衆反乱を集めて記録し、それらを基礎に組織的体系的左翼政治学を構築・理論化するのは、大変な知的作業である。１９８９年のベネズエラで起こった緊縮財政への抗議であるカラカソ反乱[2]はチャベスを勇気づけた。彼は左翼勢力をまとめて、１９９８年の大統領に勝利したばかりでなく、一見頑固に見えたベネズエラ国家をボリバール路線、社会主義路線へと、根本的に変革したのである。これは、実際の歴史的プロセスから逸脱して、何らの戦略も戦術も生み出すことができなかった（ウィルダーソンは２０２２年のインタビューで「アフロペシミズムはレーニンの何をなすべきかに答えを持ち合わせていない」と述べた）思想事業に逃げ込んだアフロペシミズムや脱植民地化研究などの思想流派が成し遂げることができなかったのことである。チャベスは、モラレスと同じように、先住民の伝統と思想を包含して、時代に適合した左翼政治を創造した。さらに、その左翼政治を、以前の世代の民族解放マルクス主義事業を引き継ぎ発展させる形で展開した（キューバのマルクス主義をラテンアメリカにとって必要かつ重要な資源として依拠した）。

屈服

オコスはアフロペシミズムと脱植民地化研究の実行にとって必要不可欠となる特徴を３つ述べている。第一は、階級関係や階級闘争を真剣に取り上げていないこと。それが意味するのは（基本的にマルクス主義の否定である。マルクス主義全体をヨーロッパ中心主義だとして拒否したのである。実際には、非ヨーロッパ人がマルクス主義に関与した長い歴史や、奴隷貿易や植民地主義と資本主義の関係を理解するために、マルクス主義思想を「少し拡大解釈」（ファノンの言葉）し、また「マルクス主義をより正確でもっと広く応用できるように」（カブラルの言葉）改良するするなど、マルクス主義を創造的に精緻化した長い歴史があるにもかかわらず、である。マルクス主義の外からマルクス主義を攻撃するヨーロッパ中心主義が現れるずっと前に、マルクス主義の内側からヨーロッパ中心主義批判があった。ジョセフ・ニーダムやイルハン・ハビブやサミール・アミンの作品がそれである。

第二は、実践の軽視である。世界変革の努力はもはや力説されず ー アフロペシミズムの場合は世界の理解や解説もしないで、ただ差別的階層分化を恒久的で希望は無益であると主張するだけである。こんな思想は変革の思想とはかけ離れ、思考を袋小路に追い込み、人々が何らかの人間的尊厳を獲得しようとする現実に展開している闘いに無関心な知識人を作り出す。

第三は、民族解放マルクス主義の提唱者の影響力が強いために、最も強力な反マルクス主義者も彼らを無視することができない。反マルクス主義思想家は彼らの牙を抜こうとする。彼らを世界変革運動の一部ではなく思想の集合体のように扱うのだ。事実上、これら反マルクス主義潮流 ー アフロペシミズムや脱植民地化研究など ー は、現実に屈服し、認識論や存在論批判だけで十分な改革になると思い込むのである。

オコスが言ったことを表す一つの例として、ガイアナの知識人、故ウォルター・ロドニーへの関心が復活していることに見られる。ロドニーはオコスの赤いアフリカの一部で、ジョージタウンで労働

[2] 抗議と弾圧の嵐は１週間続き、数百人の人民が権力によって殺害された。

者同盟を結成したときに暗殺された。左翼出版社ヴァーソ・ブックスが素晴らしいデザインでロドニーの作品を全部出版している。彼の本の中で一番よく読まれたのは『ヨーロッパがアフリカを低開発にした』（*How Europe Underdeveloped Africa*)[3]（１９７２年出版．ヴァーソ・ブックスの２０１８年版にはアンジェラ・デイヴィスの序文がある）である。ロドニーはカリブ海を離れて、タンザニアのダル・エス・サラーム大学（ヒルと略称的に呼ばれることが多い）で２期間（１９６６～１９６７年と１９６９～１９７４年）にわたって教鞭をとった。ヒルでの２期目のときに『ヨーロッパがアフリカを低開発にした』を書いた。第三世界従属理論が発掘した見識と、奴隷貿易とアフリカ大陸への植民地主義の攻撃に関する彼自身の解釈に基づいて書いた。原型となったのはクワメ・エンクルマが１９６５年に著した『新植民地主義：帝国主義の最終段階』[4]（*Neo-Colonialism: The Last Stage of Imperialism*)である。これはエンクルマがガーナの大統領のときに書いた本で、たぶんそのために、１９６６年に西側が策動し支援したクーデターで倒された。ロドニーは、ホー・チ・ミン、毛沢東、エンクルマなどの人物が実践した民族解放マルクス主義伝統に沿って確固たる信念をもって執筆した。この本とエドアルド・ガレアーノが１９７１年に著した『収奪された大地ラテンアメリカの５００年』（*Open Veins of Latin America:Five Centuries of the Pillage of a Continent*)[5]とが強い共鳴関係にあることは明らかである。ガレアーノの本は必要とされる未来の社会主義への期待に基づいて、マルクス主義的視点から文学的な力強い言葉で記述した歴史書である。２０２３年３月、コロンビア大学人類学部がロドニーの『ヨーロッパがアフリカを低開発にした』を記念するシンポジウムを開いた。その内容はデューク大学出版の『スモール・アックス』[6]で特集された。『スモール・アックス』に掲載されているシンポジウム参加者の論文は素晴らしく、みんな実に博学で、彼らの知識をつなげれば宝庫となるであろう。しかし、手放しで喜べない点がある。評者たちはロドニーがマルクス主義的方法論だけではなく共産主義の政治に傾倒したことに戸惑って、我々が生きている現代向けにポスト・マルクス主義者ロドニーを復活させようとして、ロドニーの全容を伝えていない。（実際、２０２２年にヴァーソ・ブックスはロドニーの政治的エッセイを求めた本を、『脱植民地化マルクス主義』というとんでもないタイトルで出版した。ロドニーは「脱植民地化」の先験的作家ではなく、反帝国主義マルクス主義者であったのに、まるで脱植民地化研究派とマルクス主義がロドニーの中で融合しているかのような扱いをした。）例えば、コロンビア大学教授で『スモール・アックス』の編集者のデイヴィッド・スコットの論文は、オコスが提起した諸問題の象徴のような論文である。洞察力が豊かな論文であるが、ポスト・マルクス主義者ロドニー説の欠点と限界をいっぱい含んでいる。ここではそのうちの二つを取り上げる。

１・ポスト・マルクス主義者ロドニー説：１９８０年代、ポスト構造主義やポストモダニズムなど様々な潮流からお定まりのマルクス主義否定論が現れた。主な否定論の一つは、マルクス主義は最終段階は共産主義社会になるという目的論で、史的唯物論はそういう段階論的歴史観に凝り固まっているというもの。例えば、スコットはロドニーの「段階論的発展主義的目的論」を退ける。スコット

---

[3] 邦訳として『世界資本主義とアフリカ―ヨーロッパはいかにアフリカを低開発化したか―』（北沢正雄訳、柘植書房、１９７８年）がある。

[4] 邦訳として『新植民地主義』（家正治、松井芳郎訳、理論社、１９７１年）がある。

[5] 邦訳として『収奪された大地 ラテンアメリカ五百年』（大久保光夫 訳、新評論、１９８６年、新装版として藤原書店、２０２４年）がある。

[6] デューク大学出版局が発行しているカリブ海に関する思想や文芸作品やニュースなどを専門とする有料ジャーナル

は、歴史的記述は長い歴史の流れを特徴的なまとまりに基づいて区切りをつけざるをえないという事実（従って時代を区別するために「段階論的」概念を使わなければならない）に目を閉じるので、ある意味では不誠実な手法を採っている。そのくせ、スコット自身は自分の論文では、例えば「革命時代から次の賠償の時代へと移行」というように、一つの段階から次の段階へ移行すると記述しているのである。教条主義的なお堅いマルクス主義テキスト（本来マルクス主義伝統は「お堅く」ない）は別にして、史的唯物論は頑迷な宗教的教義として段階論を主張しているのではない。世界の各地で資本主義がどのように出現したかを理解するために、資本主義以前の過去を研究するのが史的唯物論である。例えばインドのマルクス主義者は、どのように資本主義がカースト制度や部族制度を近代インド社会に取り込んでいったかを理解するために、資本主義以前の社会構造、植民地化される前の社会構造を研究しているのである。つまり、資本主義以前のインドは資本主義以前のヨーロッパと同じで、ヨーロッパと同じ段階をたどって資本主義化していったと考えてはいない。このことはロドニーが資本主義以前のアフリカに関して、明確に述べている。マルクス主義はすべての社会が一定の固定的段階に従って進展するという態度をとらない。マルクス主義をこのような漫画的に「段階論」として退ける結果、人間生活に対してマルクス主義以前の非科学的態度に戻ってしまうのである。

２．ポスト革命ロドニー説: 目的論的思考に関する批判も不可解である。現在についての思索はすべて未来につながる歴史の流れを考察する。もともと、マルクスは資本主義の矛盾によって二つの未来がある、地球と地球で生きるすべての生物の死滅の未来か、それとも社会主義の未来か、だと主張してきた。（１８４８年の『共産党宣言』でカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは資本主義内の階級闘争を「社会全体の革命的再構築になるか、それとも闘う両階級がともに破滅するかのどちらか」になると述べている）。つまり、必然的に固定された未来はないのだ。資本主義の発展によって社会主義社会への客観的条件も発展するが、変革主体も同時にきちんと現れるとは限らない。資本主義の矛盾から不安定が生じる ー 労働組合が生まれるし、階層差別社会への反乱も生まれる ー が、これら社会不安をもたらすものを資本主義から社会主義への移行を推進する原動力となる大衆的政治へと一般化しなければならない。ところが、これらの不満や反乱の力は、過去の歴史で経験したように、階層差別構造に動機付けられた排他的な憎悪の政治、ファシズムへ向かう可能性もあるのだ。

ロドニーはガイアナで労働者同盟を設立して、「社会全体の革命的再構築」のために闘争し、貧困とネオファシズムの野蛮への転落を阻止した。スコットは、今や革命の時代は終わって賠償と修復の時代となり、もう搾取の基盤が我々を規定するのでなく、新しい基盤は債務であると論じた。たしかに、人民の力を結集して革命を前進させる主体的勢力は、現在の世界の多くの場所では不在であることは認めざるを得ない。１９７０年代には左翼勢力が盛んであった英語圏カリブ海域（グレナダで新宝石革命(New Jewel Revolution)を生み出した）でもそれが不在であることを認めざるを得ない。しかし、それだからといって、将来革命運動を推進する力が皆無というわけでも、英語圏カリブで左翼勢力が復活する可能性が閉ざされているというわけではない。（その可能性は、社会主義的フェミニズム運動、農地運動、先住民運動、労働組合運動、そしてジャマイカで「苦しむ者たち」とか「アンダー・コモンズ」（普通以下の者たち）と呼ばれる運動の中に萌芽的に見られる。）スコットは、賠償プログラムは目的論に縛られていないし、「達成しなければならない未来」に心を悩ませる必要もないから、革命プロジェクトより優れていると主張する。

スコットが主張する賠償はカリブ海域の諸政府がプログラム化している。２０１４年カリブ共同体(CARICOM)２０か国は賠償戦略を具体化したカリブ共同体１０項目補償正義計画を採択した。２０１３年８月にはバルバドスのミア・アモール・モトリー首相は同国のセント・マイケルで、セント・ビンセントおよびグレナディーン諸島のラルフ・ゴンサルベス首相、ナイジェリアの元大統領（現在

のアフリカ輸出入銀行大使）オルシェグン・オバサンジョ、ジャマイカのP.J.パターソン元首相と、奴隷解放に関する対話集会（Emancipation Conversation)を開き、そこでグローバルノースに過去の奴隷制度に関する賠償を求めることに合意した。こういう問題では大衆的な盛り上がりが確実で、それ故にこのようなハイレベルの会議が行われたのである。しかし、ハイレベルの政治家が本気でこの問題に取り組むかどうかは、今後を待つしかない。（２００４年ハイチでは、賠償を要求したジャン・ベルトラン・アリスティドに対してクーデターが起きて大統領失脚となった。このクーデターは仏・米の支援で行われたと言われる）２０２３年１１月にはカリブ共同体とアフリカ連合（AU)の５５か国の会議の席で、ベリーズの経済学者でカリブ共同体事務局長のカーラ・バーネットが「私たちは補償正義を求めるグローバル運動で重要な転換点に立っている。アフリカとカリブ海域の国々は声を一つにして賠償要求を前進させなければならない」と言った。歴史家のヴェリーン・シェパードが２０００年にこの要求に賛成する文を書いたとき、この要求は、スコットも言うように、当時としてはラジカルな要求だった。今ではそれはカリブ海域の主要な要求となっている。

しかし、カリブ海域における階級的な要求が入っていなければ、賠償はおそらく民族ブルジョアジーの懐へ入り、人民のための政策を前進させる資源にならないであろう。革命政治から賠償論へと変化したスコットは社会民主主義政治へと転向した。(「社会正義、社会的平等、政治的パートナーシップのために闘うためには倫理的政治が必要である」と彼は書いている）彼は、前衛党という発想は「とても維持不可能」と書き、必要なのは「新しい政治組織と政治的動員という概念」であると書いたが、それをまったく提案していない。これは革命的伝統との決定的な訣別の宣言で、資本主義の永続性という考え方に同調するものである。彼は資本主義の人間化と言いながら、資本主義を人間化するのに役立つ手段は考えつかないと言っているのである。これでは資本主義現在の永遠性という思想に無条件屈服したことになる。この屈服こそが、オコスを彼の赤いアフリカ、民族解放マルクス主義とアフロ・マルクス主義（オコスはこの両語を互換的に使用している）へ向かわせたのである。

現実

『赤いアフリカ』は何人かの汎アフリカ主義マルクス主義者の略歴を書いた後で、いきなり「赤いアフリカの廃墟から現代の共産主義を築くのは我々の仕事だ」と主張する。しかし彼は、様々な左翼政治思想の組織が展開している現在の闘い、アフリカ大陸の新しい可能性を構築する現在の闘いの地図を示していない。これらの闘いはアフリカの可能性を規定するグローバルノースの植民地主義的態度と構造に対する反感から生じている。グローバルノースのアフリカに対する破壊行為の最近における例をあげると、ＮＡＴＯのリビア破壊、米国のＡＦＲＩＣＯＭと呼ばれる軍事プロジェクトとアクラからジブチまでに散在する多くの米軍基地、ブルキナファソ、コートジボワール、マリ、ニジェールへのフランスの定期的な介入、ＩＭＦを使ってアフリカ諸国に緊縮財政と債務不履行の脅しで北の国際鉱山会社の意向に従属させることなどがある。ここではそういう闘争の全部を紹介する余裕はないが、以下にその一部を列記する。

１。サヘル（サハラ砂漠南縁の地域）の動き。ブルキナファソ、マリ、ニジェールの政府は、サンカラ[7]に刺激されて、愛国的な反フランス政治を敢行し、だんだんと反帝国主義政治になっている。

[7] ブルキナファソ第５代大統領のトーマス・サンカラ。３７歳のとき暗殺された。アフリカのチェ・ゲバラと呼ばれた。

２．現代汎アフリカ主義として知られるネットワークを通じて社会主義的・汎アフリカ主義的アジェンダが復活している。ネットワークはガーナ、南アフリカ、チュニジアなどの政治党派で構成されている。
３．ベナンの共産党のフィリップ・ヌージェヌームを議長とする調整会議を持つ西アフリカ人民機構（WAPO）の出現。
４．２０１８～２０１９年革命に関わったスーダンの様々な団体の闘い。その団体は国民合意軍（NCF)、自由と変革軍、地方レジスタンス委員会、スーダン専門職組合等で、スーダン共産党がすべての組織に関与している。

この一覧表に加えなければならないのは、新たにアフリカ大陸に関する思想戦に入ってきた、以下のような組織である。
１．ウコンボジ図書館、オーガニック知識人ネットワーク、ヴィータ・ブックス[8]などが生み出しているケニアの新しい力強いエネルギー。これらの組織は、ケニア独立の闘士で暗殺されたピオ・ガマ・ピントやその他の人々が残した民族解放マルクス主義の遺産を引き継いでいる。
２．アフリカ経済がアフリカ人にとって危機だが多国籍企業にとってチャンスであることに注意を払い、アフリカ人の中心性を奪うために人種差別と女性差別思想が利用されていることを説いている新しい世代の研究者が現れた。彼らには二つの潮流がある。一つは、ナウイ共同体（afrifem macroeconomics collective)で、汎アフリカ主義フェミニストのマクロ経済政策論を掲げ、女性を労働の中心に置く。二つは、ナウイ共同体と緊密に協力するアフリカ政治経済共同体（CAPE）で、グリーブ・チェルワがそのコーディネーターである。２０２３年４月に CAPE は声明を出した。少し長くなるが、その最後の段落を次に引用する。

> CAPE はアフリカ大陸と広く第三世界の経済的及び全面的解放に取り組んでいる多様な人々から成る新しいアフリカ人団体です。CAPE は１９６０年代の独立後の運動で活躍した前世代の知識人の解放的な学説や政治を復活させ、それを現代社会のニーズの合わせて再構築しようとしています。その世代の教えと彼らが作った制度的インフラが、主として IMF と世界銀行が１９８０年代から開始した構造調整プログラム(SAPs)のために、ほとんど忘れ去られています。アフリカや第三世界の進歩的研究などを骨抜きにして、全般的な破壊をもたらしたのは SAPs です。CAPE が圧倒的多数派の人民のニーズと願望を中心に据えて、現在と未来を再建する生命の息吹を吹き込みたいのは、まさに IMF らによって破壊された社会に対してです。

３．２０２４年はアミルカル・カブラルの生誕１００周年にあたる。カーボベルデの首都プライアでアミルカル・カブラル財団が、カブラルの作品の出版など、いろいろなイベントを行う予定である。アントニオ・トーマスのカブラルの伝記（２００７年にはポルトガル語版、２０２２年には英語版）は、カブラルの遺産を研究し・回復するうえで、非常に役に立つ。
４．コンゴ民主共和国（DRC)の首都キンシャサでアンドレ・ブルアン文化センターが設立されたことは、著名なコンゴの学者で政治理論家であった故アーネスト・ワンバ・ディア・ワンバを慕う人々を惹きつけ、エネルギーを活気づける。また、コンゴ共和国独立期の初代首相であったパトリス・ルムンバの親しい同志であったブルアンの活動を復活させることになるので、現在 DRC 政府によって

[8] 『ケニア社会主義者』を出版したナイロビの左翼出版社。

抑圧され、あるいは体制内に組み込まれて飼い慣らされているルムンバ主義者を活性化 させるのに役立つかもしれない。
５．イッサ・シヴジ、サイーダ・ヤヒヤ・オスマン、エングワンザ・カマタの共著のタンザニア独立運動闘士で初代大統領となったジュリウス・ニエレレの３巻から成る伝記である『反乱としての発展』(Development as Rebellion)が２０２０年に出版された。出版したのはウォルター・ブゴアが経営するダル・エス・サラームにある有名なムクギ・ナ・ニョータ出版社である。ムクギ・ナ・ニョータ出版社はロドニーの『ヨーロッパがアフリカを低開発にした』も出版しているし、オコスの赤いアフリカの流れを汲むアゴスティンホ・ネトやサモラ・マッヘルやその他の人の作品も出版している。ダル・エス・サラームにはロドニーを含むラジカルなサークルからシヴジ、ヤヒヤ・オスマン、ブゴヤなどが政治活動家として登場した。現在、彼らはタンザニアの活気あるの農民運動（MVIWATA）などの分野で活動している。
６．農民に関しては、ジンバブエのハラレにあるアフリカ農業研究所（現在は、２０１５年人に亡くなった創設者のサム・モヨに因んでサム・モヨ・アフリカ農業研究所と呼ばれている）がアフリカ大陸の農業闘争の研究と理論化を行っている。研究所は２００２年に「南の農業ネットワーク」(Agrarian South Network)を立ち上げ、１０年後に『南の農業：政治経済ジャーナル』(*Agrarian South: Journal of Political Economy*)という貴重な雑誌を発行した。南の農業ネットワークはグローバルサウス３大陸の若い研究者のためにサマー・スクールや研修会を開催している。このような研究所は、マルクス主義と民族解放の潮流から生まれた知識人たちが１９７３年に設立したアフリカ社会科学研究発展評議会が耕した土壌から、生まれたのだ。評議会は１０以上のジャーナルを発行しているので、それを読めばアフリカの現実に関するアフリカ人学者の考えに接することができる。
7.　エンクルマの知的伝統と政治的遺産の復活は、遅ればせながらも歓迎したい。エンクルマ復活に貢献したのはガーナ社会主義運動である。彼らは１９６６年2月２４日のエンクルマ追放を追悼するイベントを毎年開き、その日を「嘆かわしい日」と呼び、エンクルマを陥れたクーデターに関する資料を収集して『大策略」(The Great Deception)という本を２００５年に発行した。２０２４年には第四版が発行された。このエンクルマ復活によって『クワメ・エンクルマの革命的思想』(The Revolutinary Thoughts of Kwame Nkumah)が南アフリカのインカニ・ブックスとガーナのミリタント・ブックスによって共同出版された。
８．最後に、南アフリカの汎アフリカ主義出版社のインカニ・ブックスが、サンカラとカブラルの選集と、初めてフランツ・ファノンの『地に呪われたる者』のズール語翻訳版（Izimpabanga Zomhlaba)を出版した。この出版社はヨハネスブルクのコミューン書店に居を構え、アフリカ左翼出版社連合を通じて、アフリカ大陸の左翼文献を広めるという抱負を持っている。
　以上のアフリカ大陸における思想闘争に関連したリストは網羅的ではなく、気が付いたものをリスト化した示唆的なものである。オコスが示した赤いアフリカの実際の世界の一部である。しかし、客観的冷静さで記述しただけでなく、もっと多くの運動組織を作り、もっと多くの大衆動員プラットフォームを作り、もっと多くの理論、プログラム、戦略を議論する必要性を感じて記述したものでもある。